

平成31（令和元）年度 第1回学校運営協議会 キャリア部会 議事録

神奈川県立横浜清陵高等学校

1 日 時 令和元年5月15日（水） 13:30～15:30

2 会 場 県立横浜清陵高等学校 会議室

3 内 容

- (1) 開会
- (2) 校長挨拶
- (3) 出席者紹介
- (4) 横浜清陵高等学校「総合的な探究の時間」について
- (5) 協議「キャリア教育で求められる今後の英語教育について」
- (6) 閉会

- [送付資料]
- (1) 資料1 高等学校学習指導要領（平成30年告示）抜粋
 - (2) 資料2 高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 抜粋
 - (3) 資料3 横浜清陵高等学校におけるこれまでの取り組み
 - (4) 資料4 横浜清陵高等学校「総合的な探究の時間」年間指導計画
 - (5) 資料5 新たな英語教育のための改革とその背景
 - (6) 平成31年度 年間行事予定表

4 出席者： 計10名

【キャリア部会】

伊藤 智則	一般社団法人 神奈川経済同友会 専務理事
高原 考治	学校法人桜美林学園 桜美林大学 入学部 部長
西木 祐子	学校法人岩崎学園 横浜fカレッジ 教務部 部長
平戸 明彦	本校キャリアアドバイザー
榊中 規男	学校法人河合塾 教育研究開発本部 教育研究開発部 上席調査役
坂本 宏明	本校 副校長

【横浜清陵高等学校】

校 長	田中 顯治	
総括教諭	中西 宏光	(企画広報グループGL)
教 諭	船田 弘子	(企画広報グループ)
〃	宮崎 貴美	(〃)

5 議事

(1) 開会

(中西)

令和元年度第1回学校運営協議会・キャリア部会を開催いたします。

(2) 学校長挨拶

(田中校長)

私は、本来、平成31年3月31日をもって定年退職ということでしたが、4月1日付で再任用として引き続き本校の校長に任命されました。これまで、総合学科から普通科への改変業務を中心に取り組んでまいりました。本校はここ数年、高校入試倍率が上昇してきております。神奈川県 averages な入試倍率が1.19倍であることを考え合わせますと、中学生・中学生の保護者・中学校・塾などから本校に対して一定の支持が得られているのではないかと感じております。これまでの改変作業については周囲から注目されている状況です。しかし、我々としては責務を果たしていかなければならない時期に来ていると考えております。今年度で普通科が3学年揃いましたので、今度は入り口の部分ではなく出口の部分で本校の教育の成果を問われてきます。本校としては、まだこれからも内部の教育の質を上げ、普通高校として更に地位を確立していかなければならないと考えています。前回、昨年度のキャリア部会でいただいたご意見は、本日お話しさせていただく「総合的な探究の時間」にある程度取り込ませていただいたと考えております。本日も「総合的な探究の時間」について、またさらに協議において「高大接続におけるキャリア教育で求められる今後の英語教育について」について取り上げさせていただき、有意義なものにさせていただけたらと考えております。よろしくお願いいたします。

(3) 出席委員紹介

出席委員の自己紹介

伊藤 智則	一般社団法人 神奈川経済同友会 専務理事
沖田 智大	学校法人神奈川大学 学長室 課長 (欠席)
高原 考治	学校法人桜美林学園 桜美林大学 入学部 部長
西木 祐子	学校法人岩崎学園 横浜fカレッジ 教務部 部長
平戸 明彦	本校キャリアアドバイザー
榊中 規男	学校法人河合塾 教育研究開発本部 教育研究開発部 上席調査役
坂本 宏明	本校 副校長

横浜清陵高校職員より自己紹介

校 長	田中 顯治	
総括教諭	中西 宏光	(企画広報グループGL)
教 諭	宮崎 貴美	(企画広報グループ)
”	船田 弘子	(”)

(4) 横浜清陵高等学校「総合的な探究の時間」について

資料1 『高等学校学習指導要領（平成30年度告示）抜粋』

資料2 『高等学校学習指導要領（平成30年度告示）解説 抜粋』

資料3 『横浜清陵高等学校におけるこれまでの取り組み』

資料4 『横浜清陵高等学校「総合的な探究の時間」年間指導計画』

に基づき、田中校長から次の通り説明を行いました。

（田中校長）

「総合的な探究の時間」は、平成30年に告示された学習指導要領によって示されました。小中学校では「総合的な学習の時間」を行っており、これはそのまま継続して実施されます。しかし、高等学校については「総合的な探究の時間」として変更が行われました。そこには様々な理由があると考えますが、小中学校と比較して、高等学校は「総合的な学習の時間」が進路講演や特別行事に充てられがちであるなど、本当の意味での総合的な学習になっていないのではないかとということから変更があったものと考えています。

本校は、昨年10月に神奈川県より「総合的な探究の時間」の研究開発指定校として指定を受け、今年度の1年次生より「総合的な探究の時間」を先行実施することとなりました。本校職員全員が集まり、じっくりと研究討議・決定をしていくことが時間的にも難しかったため、西海前教頭を中心にワーキンググループを立ち上げ、準備を進めてまいりました。突貫工事のように組み立てていったものであるため、実際に実施していく中で再構築していく必要があると考えています。

私自身、これまでに神奈川県総合高校で「総合的な探究の時間」に類似した取り組みを経験してきました。しかし、その取り組みをそのまま本校に移行できるかという点で難しい部分があります。静岡県の掛川西高校で行われている事例では、空気中のフクロウのDNAを採取し、どのようなフクロウが生息しているかを調べ、鳥インフルエンザへの罹患状況を探るなどという事を行っているようです。もちろんこれはこの生徒の力だけではなく、生徒を指導する教員の力に依る部分も大きいわけですが、本当に探究を行うには、生徒が基本的な学力の他に好奇心や探究心を身につけていないと行き着くことができません。本校の生徒にこのような探究心を身につけさせるには、相応に時間がかかると考えています。本校の3年次のカリキュラムに卒論のように「総合的な探究の時間」を設置した場合、2年間の学びを土台にして行うことができますが、一方で上級学校進学に対応できないのではないかと懸念もありました。

資料3（『横浜清陵高等学校におけるこれまでの取り組み』）にあるように、本校ではこれまでに総合学科の特色科目として、1年次で「産業社会と人間」2年次で「コミュニケーション」「視点」3年次で「探求」という取り組みを行ってきました。その後、本校は学科改変され、普通科として「総合的な学習の時間」を実施してきたという流れです。そして、資料4（『横浜清陵高等学校「総合的な探究の時間」年間指導計画』）が、今回県に報告した「総合的な探究の時間」の指導計画です。高校3年間で段階に分けて取り組みを進めるとなっていますが、今年度の1年次生は、NPO法人「未来をつかむスタディーズ」の力をお借りしながら進めています。世界の様々な課題に注目させながら、その中で自分自身が関心のあるものから課題を発見し、解決させるという取り組みをまさに始めたばかりという状況です。アクティブラーニングを行うことで主体性や協働性を身につけ、ポートフォリオを作成することで自身の活動を振り返り、「総合的な探究の時間」で探究力を身につけることが、「生きる力」「学び続ける力」につながっていくと考えています。これまでの「総合的な学習の時間」と同じようなことをとりあえずやっていくというのではなく、「総合的な探究の時間」で探究力を育成することを本校の特色にしていきたいと考えています。中学から高校へ進学していきなり探究を行うことは難しいので、2年次生まで時間をかけながら、新たな知識や興味関心の領域を広げ、その上で新たな探究の道がさらに広がるようとりくみを行っていきたくと考えています。まだ新たな取り組みを始めて数時間分しか行っていませんので、まだ先が見えない部分もありますが、このような形で「総合的な探究の時間」を進めていこうとしているところです。

(中西)

皆様の方からご質問等ございますでしょうか。

(梶中委員)

探究は色々な学校で取り組まれていますので、すでに沢山の事例があると思います。様々な外部の力を借りてやっていくことも大切です。ただ、一番大変なのは先生方だと思っています。これまでの「総合的な学習の時間」と決定的に違うのは、探究の問いをたてるのは子どもたちであるという点です。ある程度の方向性を教員側が示すことが必要です。成功されているところでは、先生方が教科横断型のチーム体制をとり、協力して取り組んでいる例が多いようです。とりわけ、家庭科の先生を中心に置くと面白い取り組みに結びつくようです。家庭科の先生は、家庭の経営・環境問題・医療問題・老人福祉など幅広い知識を持ち、アクティブラーニングのような学習を行ってきている方が多いようです。

(田中校長)

前述の神奈川総合高校では、生徒個々に課題を立てさせ、それを教員個人に割り振る形で課題研究を行っていました。担当教員が分からない事については、他教科の教員に聞きに行きなさいというように助言し、教科横断的に取り組んでいました。

「総合的な探究の時間」で扱うテーマについては、県からは SDGs など学校側で予め設定した中から生徒に選ばせて取り組んではどうかという助言もありました。しかし、本来の探究は個々で探究したいテーマが異なると私は考えているので、生徒がそれぞれに課題を立てるという方法で進める形にしたいと思っています。

(梶中委員)

課題はなんでもよいとしてしまうと、子ども達が選べなくなってしまうと考えます。地域、例えば「横浜に関わる何か」などのように、大きな枠組みを学校から示したうえで、生徒が問いを立てるという形にすると、生徒も方向性を見つけやすいのではないのでしょうか。実際、そのように行っている学校も多いようです。

(田中校長)

神奈川総合高校ではテーマは何でもよいとしていましたが、確かに生徒に依るところも大きく、指導する教員側は四苦八苦していました。

(中西)

私も神奈川総合高校におりましたが、我々の時には、数学はほとんどの生徒に人気なかったことから、数学以外の課題を担当することが多くありました。しかし、我々が分からない分野に関する課題も多いので、とにかく専門家の方の所にメールをさせたり、訪問させたりしていました。生徒の方も新幹線に乗って行って取材をするなど行動力がありませんでしたが、なかなかそのようなところまでっていくのは難しい所もあるのかもしれません。

(高原委員)

自分自身で探究をするという点がこれまでの総合的な学習と異なってくるというのが1つのキーだとおっしゃっていましたが、大学としても JAPAN e-Portfolio で見ることでできる高校時代の取り組みの中でも一番興味があるのは、「探求で何を行ってきたか」「どのような問いを生徒さんが立てることができたのか」という点だと考えています。きちんと自分自身を理解し、何に興味関心があってその課題に着目したのかという所まで高校時代に1サイクル分だけでも行っていれば、大学進学後に大きな違いが出てくると考えています。

桜美林大学では、今春から本学の高大接続コーディネーターとして、元 NPO 法人カタリバの今村亮を迎え、特に探究活動についてどのように向き合っていたらよいか取り組んでいるところです。

(田中校長)

ポートフォリオについては、昨年度あたりから各大学がどのような生徒を求めているかという情報が出てきていました。入学願書などもそうですが、本当に真剣に内容を見られているのだというのが伝わってくる大学もあります。進路の関係もあることから、本校の生徒達にはまず2年次で探究を一段落させ、3年次の前期で発表を行う予定です。本校は進学に重点を置いた学校づくりを行っていますが、本当に生きる力を身に着けることを考えれば、大学進学であれ専門学校進学であれ、絶えず学び続けていこうという姿勢がない限りは厳しいと考えています。これが、いずれ AI やロボットが発展した社会になっても対応していくことのできる人を育てることにつながるのではないのでしょうか。

(伊藤委員)

時代が大分変わってきており、入社して定年まで同じ会社で勤めあげるといった時代ではありません。転職してそれぞれのステージでその人の生きる力が必要とされてきていると思っています。探究で課題として設定した内容も、実は調べようとすれば簡単に調べられる時代です。どのように向き合い取り組んでいくかという姿勢が大切となってくるのではないのでしょうか。

(西木委員)

ファッションの世界でも、ファッション好きだけが携わっているわけではなく、テクノロジーの方面などから関わる人もいます。ファッションに軸足を置きながら、テクノロジーがどのように関わるか、考えられて学び続けられる人が必要となってきました。自分の専門性を身につけたうえで、そこから学びを広げていくことができる人が10年後20年後に活躍し続けられるかという所につながっていくのではないのでしょうか。

(平戸委員)

昨年度、本校の生徒に、清陵の生徒に足りないのは学習を継続する力であると伝えていました。総合学科時代の生徒は、自身の進路選択に職業インタビューなどを活用していました。また、インタビューで得た経験や話を志望動機として入試に使っている生徒も多くいました。探究は、学校での学びが世の中にどのようにつながっていくのか知る機会の1つとなり、学習を継続する姿勢につながるものだと考えています。

(田中校長)

「A大学に何人」と数に着目するのではなく、生きる力を身に着け、それぞれの進路を実現する生徒を育てたいと考えています。3年次になってから慌てて、今の学力で行ける大学・行ける専門学校を探すのではなく、自分の学びたいことがあった上で進学先を探し、選ぶようにさせたいです。勉強時間については、本校生徒の現状からまだ増やすことができると考えています。ここにさらに生きる力を身に着けてさせることができればと考えています。

(5) 協議「キャリア教育で求められる今後の英語教育について」

資料5 『新たな英語教育のための改革とその背景』に基づき、田中校長から次の通り説明を行いました。

(田中校長)

資料5にあるように、現行の平成21年3月改定の高等学校学習指導要領から、英語教育においてコミュニケ

ーション能力を育成し、「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能をバランスよく育成することを目指し、「コミュニケーション英語Ⅰ」が共通必修履修に変更されました。

また、昨年、東京大学では2021年度入試から出願要件として、「CEFR 対照表のA2 レベル以上に相当する英語力」を挙げ、民間の英語試験の成績等が記された調査書の提出を求めることになるとの発表がなされています。しかし、多くの国立大学では、受験者の数を確保したいという点などから疑問視する流れもあるようです。これについては、高原委員の大学ではどのような状況になっていますか。

(高原委員)

本学では、昨年の一般入試から外部試験をみなし得点として算入することになりました。加点とするかみなし得点とするかは、大学ごとに様々であるようですが、例えば、英検2級であれば、本学の英語試験70点を認め、本学の一般入試で70点以上をとればそちらをとるなどということを行っています。大学としては、社会で4技能を求められている他、大学としてグローバル化・海外へ出ていく学生を多く輩出したいという目標があります。このことから、このような力を持った学生をより積極的に入学させたいという大学の意思を表していると言えます。それぞれの大学によって、置かれている立場や学生に求めるものが異なっています。

外部試験については、本当はTOEFLを受検したほうが良いという思いもありますが、高校レベルから考えると、アメリカ社会の背景に対して理解していないと難しい部分もあるのではないのでしょうか。

(榊中委員)

国立大学協会がCEFR A2 レベルというのを定めていたりする中で、それは不要であると主張している大学もあります。2～3年前から難関大学を中心として、大学院入試でも行われていないスピーキング技能をなぜ学部で行うのかという意見も多く挙がっているようです。この尺度を使わないと言い切ったのは東北大学や北海道大学。また、金沢大学や教員養成系の大学ではA1 レベルで可としているところが見られます。英語のハードルを高くすることで、英語が不得意だが理科数学が得意な生徒を排除することになるので、いかがなものかという考えの大学もあります。私立大学などは、周囲の国立大学の様子を見ているところです。慶応大学は利用しない、早稲田大学は一部の学部で利用すると公表しています。今年くらいには出そろうのではないのでしょうか。

(田中校長)

次年度の入試要項がそろそろ発表されていることから、各大学の出方に注目していかなければならないと考えています。これからの社会でどのくらい英語が必要になってくるのかという点も気になるところです。

(西木委員)

卒業生を見ると、美容師でも日常会話レベルでの英語や中国語を理解することが求められてきつつあります。日常会話レベルの基本的語学力を高校卒業までで身に付けていただければと考えています。

(伊藤委員)

私は銀行出身なのですが、募集時にTOEICの点数が高かったり海外留学経験があったりする学生を募集するものの、いざ入社すると海外支店への勤務を希望しない例があります。英語ができることと、海外勤務の希望は別物で、海外に飛び出す意欲を持った人を育てることを並行して行っていかなければ、効果が出ないのではないだろうかと考えています。

英語教育についてこの位のレベルまではやってほしいという中に、自分から外国人に接することができる意欲を身に付けさせる、異文化に対する壁の低い学生づくりというのも必要だと考えます。

(高原委員)

就職活動時には TOEIC の得点がある程度求められています。TOEIC の得点の実績をもっていると、その他の研修に時間を割くことができるという意味でそのようなハードルを設けている会社もありますが、なんとなくこの程度あればよいという事でハードルを設定している会社もあるようです。そのようなことから、インプットすること、TOEIC の過去問を解く事に注力してしまう学生も多くいます。相手とコミュニケーションをとるなど、アウトプットの部分を伸ばしていくことが必要になってくると考えます。

基本的な力として、英検 2 級程度の英語力は必要なのではないのでしょうか。

(田中校長)

三井物産などでは、新卒社員にミッションを与えずに海外へ送り出すということをやっているようです。コミュニケーションを取らせることに重点を置かせているようです。

(平戸委員)

手段の 1 つとして、英検 2 級を目指せということで校内でも生徒に勧めてきました。学校全体として、「全員英検 2 級を」という対外的に分かりやすい目標を掲げた方がよいのではないかという気持ちもあります。

(田中校長)

横浜市では中学 3 年生は英検 3 級を全員無料で受検できるという取り組みもあるため、神奈川県順位が急激に上昇しているようです。しかし、本校の現状としては英検の取得率はもっと低いのではないだろうかと思えます。これについては、なかなか難しい部分もあります。

個人的に、みなとみらい地区を歩く機会が多いのですが、あの限界では英語が飛び交っています。日本国内での営業規模は縮小している会社も多い一方、海外で大きな売り上げを挙げている会社もあります。日本で継続して働くことを考えたとき、海外に出ることを恐れない人材が求められているのではないのでしょうか。

(榊中委員)

全体的に考えると、当然英語は必要になってくるだろうと考えます。横浜銀行さんでも、海外支店でなくとも海外からのお客さんが来ることを考えると英語が必要になってくるであろうと思えます。

高大接続における英語教育、キャリア教育・キャリア形成で求められる英語教育、高校で基本として行うべき英語教育、それぞれで求められる英語力は異なります。純粋にビジネス英語といえば TOEIC ですし、海外留学ということであれば TOEFL や IELTS など、コミュニケーションであればケンブリッジ英検、高校教育に最も近いのは英検というように英語力を測る尺度は様々です。様々なことを考えたときに、やはり高校ではまず文法の基礎基本をしっかり身に付けさせることが求められるのではないのでしょうか。

(田中校長)

高等学校レベルで、英語を聞く力と話す力をどの程度まで身に着けたらよいのかという点が問題になってきていると思えます。高校での英語教育は、大学受験を見据えていかないといけないという面もありますが、まずは話すこと・発信すること・コミュニケーションを取る事に重点をおき、恐れずに発信しようという姿勢を生徒に身に着けさせていくことが大切なのではないかと考えています。

(西木委員)

話すこと・聞くことはコミュニケーションの基本で、楽しいから話したくなるのだと思えます。話さなければならぬと考えると、とたんに話すことが難しくなってきます。話すこと・コミュニケーションをとることは楽

しいことであると思え、学びの継続につながるような取り組みを清陵高校でも取り入れていただけるとよいのではないのでしょうか。

(高原委員)

4年前に本学でグローバルコミュニケーション学部を立ち上げたとき、AOと推薦の入試は面接で、その半分は英語で行いました。話す意欲のある生徒さんは、間違っているでもいいから自分の知っている限りの単語を使い、積極的にコミュニケーションをとろうとしていました。一般入試においても偏差値が上昇してきているのですが、上位のクラスに属する学生が苦勞しているのが、話すということです。その点に苦手意識を持っていることから、昼休憩などに留学生に関わる事ができるスペースを積極的に利用しているようです。授業外で話す機会を増やすことができるという点や、文法や単語の間違いを気にせずとにかく話すことができるという点がよいと考えているようです。

(平戸委員)

清陵では、英語を勉強する価値について生徒に話していました。これを頑張ると後でとても楽だよ、お得だよというように伝えていました。今後に向けて、なぜ英語をやる必要があるのか伝え理解させることで、英語の学力が上昇していくのではないかと考えます。

(榊中委員)

私立高校だと、英語に耳を慣れさせるという意味で音楽や体育の教員を外国の方としていたり、数学などに英語を取り入れていたりするところもあるようです。県立学校ではなかなか難しい部分もあるのですが、日常的な学校行事や学校活動に常に英語を使い英語をしゃべっているグループがいるということも大事なのではないかと考えます。

(高原委員)

清陵高校には外国人の生徒はいらっしゃるのでしょうか。

(坂本委員)

在県外国人の生徒が各学年10名ずつと、一般入試で入学する生徒が若干名在籍していますが、英語圏は少ないです。一番多いのが中国語圏、タガログ語です。英語力・表現力などは、このような海外につながるのある生徒が突出した成績をあげていますが、日本語を用いるとなると難しい部分があります。本校以外の高校では、高校入試において英語の得点を2倍換算している学校もありますが、その場合、ともすると国語を全く勉強せずに合格してしまう場合もあるようです。しかし、それで将来やっていけるかという疑問が残る部分もあります。

また、本校では帰国子女は少ないです。帰国子女の場合、英語はできるけれど他ができない、語学の習得について環境で苦勞はしているけれど勉強において努力をしていないケースも往々にしてあります。

本校の生徒たちはそこまでは到達しておらず、Writingの点数はそれなりに出てくるのですが、SpeakingやListeningなどでは中学レベルという様子も見られます。

(田中校長)

失敗を恐れなくて英語をしゃべることのできる環境づくりが必要になってくるのだと思います。

(中西)

数学の授業などでは、生徒はとにかく間違えることが恥ずかしいという雰囲気があり、声を発しません。そうい

う所から変えていかないとならないと考えています。失敗を繰り返し、失敗から学ぶ雰囲気を1年次から醸成し、環境をつくっていくことができれば、また変わってくるのではないのでしょうか。

(榊中委員)

数学を英語で教えると、かえって分かりやすい場合もあると思います。なぜ「点O」や「点P」や「半径r」なのかなど、なるほどと思うこともあります。

(伊藤委員)

清陵高校は部活動が盛んですが、文科系の英語クラブのようなものはないのでしょうか。

(坂本委員)

ESSはありません。国際交流部はあります。

(田中校長)

小学校の3～4年では積極的に手をあげる生徒も、5～6年生になると間違えることに臆病になるようです。発表で間違える事が恥さらしになるような授業ではなく、なぜどのようにそう考えたのか、何が間違っていたのか等を授業のクラス全体で共有し、よい機会を得ることができたという認識を持たせることが大切なのだと思います。我々が授業の進め方・教え方のテクニックを改善していくことで、生徒が授業や学ぶことに対して積極的に取り組んでいくことにつながると考えます。

(中西)

我々ができることといえば、環境を変えていく、雰囲気を醸成していくということだと思います。教員によって授業の進め方や手法は異なりますが、様々なバックグラウンドをもった他の教員の良い所を積極的に学びあい、授業の改善につなげていくことのできる仕組みや雰囲気づくりも必要なのではないのでしょうか。

(田中校長)

以前所属していた市ヶ尾高校ではESSがあり、横浜国立大学の留学生と交流を持っていました。本校でも、桜美林大学の留学生の方などと交流を持つことができればということも考えています。本校の生徒たちに英語教育をフランクな形でさせていくという事を考えるのであれば、そのような大学とのつながりを持つことができれば、より積極的に取り組むことができるようになるのではないかと考えています。

(榊中委員)

学校内でできるかはわかりませんが、英語しか使えないバーベキュー会などというのも面白そうですね。

(中西)

最後に副校長から何かございますか。

(7) 閉会

(坂本委員)

「総合的な探究の時間」については神奈川県から研究指定校に指定されたこともありますが、その他にも新しい取り組みを進めていこうという気持ちはあるものの、金銭的な面や時間的な面で様々な制約があります。また、「総合的な探究の時間」は、3年間で84単位修得するうちの3単位分であり、それをコアに据えようと思いつつ

も、なかなか思うように進まない部分もあり、苦しんでいる現状があります。本日の会議で頂いたご意見を参考にさせていただきながら、これからの学校づくりをより一層進めていきたいと考えています。秋にはまた第2回キャリア部会を開催し、状況の報告をさせていただきながら更なるご意見も頂きたいと考えています。

英語教育については、進学後を含め、ともすれば将来の道を閉ざすことにつながりかねないという事もあり、待ったなしで取り組んでいかねばなりません。教える側の人間は昔の教育を受けてきた者が多い中で、どのように取り組んでいくか悩みながらやっていくところです。そのあたりについてはぜひまたご意見を頂戴できればと思っております。本日はありがとうございました。